

武蔵野市の公衆浴場

かつては武蔵野市内に多くあった公衆浴場、いわゆる銭湯も、今では1軒の営業となっています。
公衆浴場の歴史を振り返りながら、入浴だけでなく地域のコミュニティを育む場としても機能してきた
「まちの銭湯」の役割と存在意義について考えてみましょう。

銭湯の煙突が まちのランドマークだった

まちのそこかしこにあった公衆浴場。

人々が汗を流し、湯に浸かって1日の疲れを癒やし、近所の顔見知りと語らう憩いの場として地域に根差して営業を続けてきましたが、近年、その数は激減しています。家庭風呂の普及による利用客の減少、施設の老朽化、改修を担う職人の不足、経営者の高齢化と後継者不足など、閉業の理由はさまざまですが、武蔵野市でも、平成3年に17軒あった公衆浴場は、令和4年5月現在、営業中なのは境南町の「境南浴場」1軒のみになっています。その武蔵野市における公衆浴場の状況について触れる前に、公衆浴場の歴史を簡単に振り返ってみましょう。

文献によれば、後の銭湯に該当する入浴施設は平安時代に既にあったという説もありますが、鎌倉〜江戸時代に入って湯屋、風呂屋として広まったとされています。以降、明治・大正・昭和と、まちの発展や人口の増加とともに公衆浴場の数も増加。屋根からそびえる煙突はまちのランドマークにもなりました。

特筆すべきなのは、東京の公衆浴場



昭和30年代の境南浴場の外観と周囲の風景

の経営者は、新潟・富山・石川の北陸3県の出身者が多かったこと。この地方の出身者は出稼ぎとして上京して浴場で働くことが多かったといわれ、やがて「のれん分け」のようにして経営に携わり、都心から都下へと広まっていったとされています。現在、武蔵野市で1軒営業している境南浴場の代表・毛利友昭さんによれば、「うちの創業者である祖父の太六も富山県の出身です。銭湯の経営者に北陸3県の出身者が多かったのは事実のようで、最初に成功した人が親戚や地元の知り合いを呼び寄せるようになって、『銭湯は儲かるらしい』と上京する人が増えていったと祖父から聞いたことがあります。〇〇組という地元出身者の派閥

のようなものもあって、今でもその名残がありますね」といいます。

境南浴場の創業は昭和29年ですが、もともとは武蔵野市の市営浴場として営業していたところ、この年に毛利さんの祖父・太六さんが市から買い取る形で民間の浴場としての営業をスタート。昭和23年に東京都が公営公衆浴場設置に向けた交付金制度を設け、これを受けて武蔵野市でも市営による公衆浴場の設置が始まりました。これは経営希望者が用意した資金と都による交付金を合わせて浴場の建設費にあてるもので、『武蔵野市百年史』には「本市でも吉祥寺と境の二カ所に相次いで市営公衆浴場が誕生した。」と記述されていますが、このうちのひとつが境南浴場だったようです。昭和24年の武蔵野市『市勢要覧』によれば、この頃、武蔵野市内で営業していた民間の浴場はわずか6軒。すでに家庭風呂が普及



境南浴場 代表・毛利友昭さん

していたことと、戦中・戦後にかけての燃料不足などによって閉業する浴場が増えたためだと記載され、公衆衛生の観点からも市営の浴場設置を進めると記されています。

やがて昭和30～40年代の高度成長期にかけて、武蔵野市内に公衆浴場が次々と誕生したと考えられ、市の資料によれば、昭和48年4月時点で吉祥寺エリアだけでも10軒以上あったというから驚きます。境南浴場の毛利さんも



昭和48年4月時点の武蔵野市の銭湯マップ（出典：武蔵野市地域生活環境指標昭和48年版）

「おそらくこの頃が公衆浴場の軒数としてはピークだったのではないでしょうか。祖父や2代目の父から聞いた話では、うちも最盛期には定員20人のところ、およそ1000人が訪れて代わる代わる入浴するくらい盛況だったそうです」と語ります。

地域の コミュニティの場としての 公衆浴場の役割

それ以降は徐々に利用者と浴場の数が減少していったと考えてよいでしょう。それを裏付けするものとして、昭和56年に「公衆浴場の確保のための特別措置に関する法律」を国が公布していることも挙げられます。これは、特別措置による補助で公衆浴場の減少を食い止めることを目的とした法律で、この頃には減少し始めていたことがうかがえます。『武蔵野市百年史』によれば、「本市でも昭和五十八年に二二軒あった銭湯が平成一五年には一〇軒に。そして（平成）二二年九月にまた一軒、市内から銭湯の煙突が消えた。」と記されています。

市としても、こうした状況に手をこまねいていたわけではなく、「市公衆

浴場利用、高齢者地域活動推進事業実施要綱（昭和56年施行）」や「市公衆浴場活性化対策補助金交付要綱（平成5年施行）」に基づき、公衆浴場に対するさまざまな補助や活性化の支援を行ってきました。新年に高齢者を対象とした無料での入浴を実施し、「レモン湯」「ラベンダー湯」などの新たな試みに対しても補助を行い、施設の改修費用の一部も補助するなどの策を講じてきましたが、残念ながら減少に歯止めがかかることはありませんでした。ところが、ここ5、6年、漫画などの影響から若い世代を中心に一大サウナブームが到来し、風向きが変わってきました。境南浴場も、「サウナ愛好家」サウナーの聖地の一つとして市外からも多くの利用客が訪れる人気の施設になったのです。

「サウナブームで新しいお客さんも増えて、経営的には随分助かっています。サウナは25年ほど前、父が家族の反対を押し切って設置したもの。先見の明があったのでしょうか、父は10年前に他界したので、このブームを知らずじまいだったことが悔やまれます。でも、ブームはいずれ終わります。何割かのお客さんはブームが去っても残ってくれると思いますが、やはり銭

湯という場所は、長年通ってくれている地域のお客さんのためのものだと私は考えています。いま、八百屋さんや魚屋さんなど、〇〇屋という地域密着の店がまちなかなくなっていますが、私たちが『まちの風呂屋』として地域の方たちを大切にしていきたい。そう思っているんです」と毛利さん。

そもそも公衆浴場は、まちの情報が集積される場であり、地域住民のコミュニティの空間であり、子どもたちにとっては社会性やマナーを学ぶ教室でもありました。その役割やありがたみを再認識したいものです。

参考文献・『武蔵野市百年史』（武蔵野市）、『武蔵野市の公衆浴場活性化対策について』（武蔵野市公衆浴場活性化対策検討委員会）ほか
取材協力・武蔵野ふるさと歴史館



〈取材協力・資料提供〉
境南浴場（武蔵野市境南町3-11-8）